

行雲流水

No.249 令和4年9月29日発行

「学ぶことで、才能は開花する」(三国志・天才軍師 諸葛亮孔明)

校長 寒河江 正人

「学ぶこと」に「喜び」を感じられる、「学ぶこと」を脳が「快い」と感じられる欲求は、私たち人類が獲得した「最大の進化の原動力」と言っても過言ではあるまい。それは、洋の東西を問わず、人類の進化・発展の歴史が、そのすべてを物語っている。

「わかった」「できた」「もっと知りたい・やりたい」
この「好循環・継続（主体的な学びのサイクル）」こそが「才能開花のカギ」なのだ。

「一回でも実践してみると、頭の中だけで考えていたことの何倍もの学びがある。」

羽生善治 将棋棋士 プロ入り15歳 優勝回数45回 タイトル獲得合計99期（歴代1位）

「学ぶ」の語源は、「真似ぶ」だと言われている。

火を恐れていた人類は、木と木の摩擦が火を起こすことを学び、それを繰り返すことで、道具や火を利用することを学んできたという。

人類は、「生きのび、進化するための術」として、「学ぶ（真似ぶ）必要感」があり、

「先人（先輩）たちの知恵（学び）」を知り、「真似」をして、それを受け継ぎながら、「真似ぶこと」を通して、知識や技術を習得してきたのだと言えよう。

「新しいことを勉強していると世の中は怖くありません。

何もしないで、じっとしているから怖くなるんです。」

らくごか はやしやひろく
落語家 林家彦六

どうやら、本校が目指している「主体的な学習者（マナビアン）」のルーツは、その辺りにありそうだ。

最初から「独創性の高いオリジナルの学び方」にこだわる必要はない、ということだ。

まずは、本校の先人（先輩）たちの知恵（学び方・先行事例）」を「真似ぶ」ことこそが、生徒諸君がこれから目指す「主体的な学習者（マナビアン）」への出発点なのである。